

令和元年6月22日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02383

研究課題名(和文) 中世宗教・芸文テキストの生成と機構をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) An integrated study on the formation and mechanism of medieval religion and art text.

研究代表者

小川 豊生 (Ogawa, Toyoo)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：50169190

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：近年の中世宗教文化をめぐる研究は、未知のテキストの発掘や、それに基づく新たな研究によって飛躍的な進展を見ているとあってよい。本研究は、こうした研究動向、および研究代表者自らが積み重ねてきた中世宗教文化史研究(儀礼論、身体論、文字論、書物論)に関わる成果をさらに総合的な見地から発展・深化させることをねらいとして、中世宗教芸文テキストの生成と機構、なかんずく中世社会に浸透した様々な儀礼の成り立ちと書物の生成・享受との深い関わりを総合的に解明したものである。前近代特有の書物の観念の解明は、現代文化における書物の行方をも指し示すことになるはずである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

急速にデジタル化が進む現代社会において、書物文化がどのように推移するかは大きな関心と呼ぶテーマといえる。本研究を通じて解明された中世特有の書物生成のメカニズム及び儀礼や信仰の場における書物享受の実態の諸相は、こうした人類文化における書物の意義と歴史を考える際に大きな参照枠を提供するものと思われる。同時に、本研究は、神道研究や中世密教研究に新たな視座を提供するものでもある。

研究成果の概要(英文)：In recent years, studies on the culture of the Middle Ages have seen dramatic progress in the development of unknown texts and new research based on them. This research is based on the following research trends, In order to further develop and deepen the results of the study of the Middle Ages religious culture history (ritual, body theory, character theory, and writing theory) This is a comprehensive analysis of the relationship between the formation of various rituals that permeate the Middle Ages and the creation and enjoyment of the writing The explanation of the concept of the book specific to the pre - modern period also refers to the way of writing in contemporary culture This should not happen.

研究分野：中世日本文学

キーワード：書物 中世 宗教テキスト 儀礼 仏教 神道 身体

1. 研究開始当初の背景

近年の古典学および宗教学の諸領域における聖教テキストの発掘や、中世神道研究の飛躍的な進展という事態によって、書物の生成や享受をめぐる諸問題は、これまでの研究を更新する新たな「書物文化論」の構築が求められる時点にさしかかっているものと思われる。本研究は、こうした研究動向、および研究代表者自らが積み重ねてきた中世宗教文化史研究（儀礼論、身体論、文字論、書物論）に関わる成果をさらに総合的な見地から発展・深化させることをねらいとした。

筆者（本研究代表者）にとって本研究課題の設定動機は、2000年に発表した「儀礼空間のなかの書物」、2001年の「直談考 天台口伝法門のメテオロジー」等の論考に遡る（いずれもその後刊行した『中世日本の神話・文字・身体』森話社、2014年に再収）。そこにおいて筆者は、中世における宗教芸文テキストが、灌頂儀礼を典型とするさまざまな儀礼の場との密接な関係のなかで生成すること、さらに、「直談」や「見聞」を典型とする中世に隆盛した特徴的なジャンルとそのテキスト群が、天台口伝法門にかかわる具体的実践を前提に生成することなどについて明らかにした。以後、筆者は、「和歌と直談 天台口伝法門の言語論的アプローチ」や、「偽書の生成 宗教芸文史における書物の観念をめぐる」をはじめ、他の諸論「中世神話テキストの生成論、歌学秘伝テキストの形成・伝授論、灌頂儀礼における宗教実践の具体と書物生成の機構論」においてこのテーマを一貫して追究してきた。幸いにこのテーマは、同時期に平行してすすめられた幾つかの研究（例えば小峯和明氏による未来記・預言テキスト生成をめぐる一連の研究や、阿部泰郎氏の宗教テキスト体系をめぐる研究、伊藤聡氏の中世神道文献成立の解明等）とも相呼応し、それらと並走することで、研究の個性化・深化を達成できたと認識している。

書物をめぐる中世研究は、近年ますます注目すべき一角を占め、荒木浩氏による「書物の成立と夢」の関係や「宗教的体験としてのテキスト」の成立をめぐる研究、渡辺麻里子氏の直談抄をはじめとする談議書形成をめぐる一連の研究、前田雅之氏の15世紀書物の流通論、小川剛生氏による「中世の書物と学問」論や五味文彦氏の「書物の中世史」といった歴史学的研究、さらにはアナル学派の諸論に代表されるヨーロッパ中世の書物論等、意義深い研究が続出している状況にある。本研究は、こうした動向・背景を踏まえて、当該テーマのより包括的かつ理論的な把握とともに、中世における書物生成の機構のより具体的な解明をめざして開始された。

2. 研究の目的

本研究は、如上「1」で述べた研究動向を踏まえて、当該テーマのより包括的かつ理論的な把握とともに、これまで以上に焦点をしぼった、より具体的な中世における書物生成の機構の解明を目的とした。

書物論というパースペクティブは、古典学総体のベースともなり得るものだが、それだけに、ともすれば一般的な議論に流され、固有の方法と理論的な先鋭さに欠ける面がある。2014年刊行の拙著『中世日本の神話・文字・身体』第部「秘教的世界と神話の建立」および「第部 書物の中世」で展開した神話テキスト、歌書、宗教（灌頂儀礼）テキストをめぐる諸論は、こうした従来の書物論を乗り越えるための助走と位置付けたい。本研究では、それを承けた本格的な考察を目指した。

改めていえば、中世に生成した宗教芸文テキスト（仏書、神道テキスト、直談・見聞系テキスト、古典注釈テキスト、芸道関係テキスト）を横断的に扱うことによって、そこに一貫する書物生成のメカニズム 宗教実践、儀礼の技法と密接に関連したテキスト生成の機構 を具体的に・包括的に探究することを目的とする。これまでに見ない教理的・思想的内実にまで踏み込んだ総合的考察や、中世という時代社会からしか見えてこない書物の諸相を掘り起こすことによって、しばしば平板な議論に終わりがちな「書物文化論」を現代文化の抱える諸課題の最前線へと押しあげ、大きな転形期にある21世紀の書物の世界を根底から見直すための理論的基盤を確立したいと考えた。

3. 研究の方法

本研究は、前記「1」及び「2」で挙げた拙論の発展・具体化として位置づけられるものである。前記の背景と目的のもとに、具体的には内外にわたる図書館・諸文庫等に所蔵される関係文献（写本）の探訪・調査・写真収集・複写物収集、および書物論にかかわる一般研究書籍・専門研究書籍の収集を主たる前提作業とし、そのうえで全体的な考察を深め、論文・著作として成果を発表することを目指した。手順としては、研究全体の成果をより具体的に達成し、その成果を明瞭に示すために、以下の(1)～(7)の項目を三箇年に振り分けて進めることとした。

- (1) 儀礼システムと書物の役割をめぐる原論
- (2) 灌頂儀礼におけるテキスト生成の機制をめぐる研究
- (3) 宗教実践の諸相と書物の生成・機構をめぐる研究
- (4) 宗教体験としてのテキスト構造と仮託書の生成をめぐる研究

- (5) 直談・見聞系テキスト及び物語テキストにみる宗教体験と書物の生成をめぐる研究
- (6) 和歌・芸能ジャンルにおける書物の生成および伝授の観念をめぐる研究
- (7) 東アジアにおける儀礼と書物の諸相

以上の各課題は、基本的には本研究実施期間（3カ年）の全体に及ぶものだが、とくに力点を置く年度目標として、初年度の28年度は(1)(2)、29年度は(3)(4)(5)、30年度は(6)(7)をそれぞれ中心の課題として設定した。ただし、各年度の作業は、相互に関連しつつ実現されるものと考え、とくに調査の実施内容によっては各年度の目標を適宜並行させながら進行させることにした。

4. 研究成果

以下、本研究期間において発表した論考を具体的に挙げ、そのそれぞれが、上記「3. 研究の方法」で掲げた(1)~(7)の課題とどのように向き合ったものであるかを示すことにしたい。ただし、「3」で述べたように、各成果は相互に深く関連したものであり、前記7項目の課題に明確には振り分けることが難しいこと、また論考の発表順と、各年度の研究遂行の順序とは必ずしも一致していないことを断っておきたい。

まず、本研究全体の前提として、中世における宗教儀礼システムのなかで、書物がいかなる役割・機能を付与されていたか、その諸ケースを分析した。「中世の書物と儀礼」との関係は、様々な角度からの研究が可能な状況にあるが、ここではいまだ一般に知られていない儀礼世界における書物の役割の究明に努めた。その成果の一端は、「宝珠のトポロジー 中世神秘哲学序説」(以下、各論考の発表機関等、詳細なデータについては「5. 主な発表論文等」を参照)で示すことができた。そこでは、(1)(2)(3)の課題、すなわち中世における典型的な秘儀の一つといえる 瑜祇灌頂 を俎上にあげ、この儀礼と密接に関わって生成したテキスト『灌頂秘口訣』や文観『最極秘密鈔』、『東長大事』に焦点を絞って論究した。その重要度に比して、これまで明確な考察が成されてこなかった瑜祇灌頂の内実と、それに連動したテキストの制作機制とを明らかにし得たことは大きな成果であった。

(4)(5)に関連した成果としては、物語ジャンルにおいて「偽書」生成のメカニズムについて論究した「成長する物語 外伝・偽作の周辺」(『新時代への源氏学8 物語史 形成の力学』)がある。そこでは、『源氏物語』の外伝として偽作=擬作されたテキスト(『山路の露』)を取り上げ、偽書が林立した中世において、物語作者がいかなる時代精神のもとに「偽」=「擬」のテキストを生み出したか、作品に内在する論理に分け入って考察を加えた。宗教テキストに限らず、こうした文芸テキストをも視野に収めるとき、偽書の問題は新たな発見に導かれるだろう。

課題(3)(4)に関わる論考、「反転する神学 中世における「神道」成立の機制をめぐる」(『現代思想』臨時増刊号 vol. 45-2)では、鎌倉後期の神祇テキスト(『神名秘書』、『類聚神祇本源』、『神祇譜伝図記』等)を取り上げつつ、儒・仏・道との習合が極みに達した中世において、それらの強力な習合言説を反転するかたちで「神道」が成立した経緯について解明した。13世紀後期という混沌とした時代情勢のなかで、いわゆる「俗神道」を吸収しつつ新たな「神学」営為を始動させた度会行忠や度会家行らのテキスト制作の現場を垣間見る作業である。

同じく神道テキストに関連しては、「中世神道と神楽の世界 その接点を求めて」(『HERITEX』vol. 3、名古屋大学人類文化遺産テキスト学術センター編)を発表。中世神道と神楽の世界の接点を求めて、神呪や大梵天王をめぐる中世神話に焦点をあてて解明した。さらに、神道灌頂テキストの分析を通じて、それが神楽の次第といかなる連関を有するかについても明らかにした。また、同論の基礎となった口頭発表「修験の想像力と神楽の世界 中世神道研究との接点を求めて」(シンポジウム「花祭×いざなぎ流 神楽のなかの祭儀・呪術・神話」における発表)では、修験 神道 神楽の連環についても言及した。

また、「中世王権と呪術の世界 愛と怒りのほとけ「愛染明王」をめぐる」(撰南大学国際教養セミナーにおける講演)、「日本図 から読み解く中世神話の世界」(佛敎大学四条センター公開講座「神話・伝承の広がりへ」)においても、中世の宗教テキスト生成メカニズムと宗教体験や儀礼実修との連関について究明。(3)(4)の課題への密教からのアプローチであるが、とくに前者の発表では愛染王法という修法実修の具体と、その実修から生み出された秘伝テキストの諸相を分析。修法の場と秘書生成の特異な連関について論及した。

「中世と近世を横断する神話学」(日本文学協会大会ラウンドテーブル「近世神話の可能性を問う」)の発表では、有名な日光東照宮の最奥の空間(内々殿)に描かれた壁画が、天海の『麗気記』研鑽をベースとして制作されたという点に着目。加えて、16世紀以降、吉田神道を継承する吉田兼右の子梵舜、さらには平田篤胤の国学へと、『麗気記』というテキストがいまだ一般に認知されていない広範で深い享受史をもつという事実についても言及した。(2)(3)(4)に関わる研究だが、偽書の典型である『麗気記』の近世における享受をめぐるのはこれまで殆ど解明されていない状況にあり、その享受の一端を東照宮最秘の空間に見出すことができた点は、きわめて有意義な成果であった。

研究計画のうち、(5)(6)については、本研究では十分な成果をあげることができなかったと言わざるをえない。ただ、(6)の和歌ジャンルそのものに関連する成果としては、「和歌風俗論 和歌史を再考する」(『文学史の時空』所収)がある。ここでは、平安から中世にかけて和歌は「我

国の風俗」と規定され続けた事実を起点に、和歌ジャンルが、近代的な概念である「文学」ではなく、文学以前の「風俗」と認識されていたことの意味を考察した。本研究全体の課題からは逸脱するものの、「和歌は我国の風俗である」という和歌文芸に対する位置づけは、他ならない「神道」が宗教以前の「風俗」と位置付けられる明治期の特異な宗教言説とも通底し、意外にも近代宗教史(思想史)の問題と接続されていくように思われる。「俗神道」という呼称に端的に現れている 神道 風俗 という問題構成については、和歌 風俗 という和歌史の言説を視野に入れて改めて探求することが求められるだろう。

さて、最後に(7)については、儀礼の問題とは直接に関わらないが、『『夢中問答』の説話学 東アジアにおける霊性の波動』(説話文学会北京特別大会シンポジウム)と題した発表において、中国で生まれた偽経が、東アジアで広範な享受史をもち、半島・列島に大きな影響をもたらした事情について、とくに『首楞嚴經』に焦点をあてて考察した。

また同じく(7)に関連する論考である『日本文学史 第二冊 「文」と人びと』所収「第三章 宗教の言説 中・近世宗教世界のリテラシー」は、編集の趣旨に沿って、日本において「文」はいかなる役割を果たしてきたか、「文」概念の可能性を東アジアの宗教言説の視座から論究を試みたものである。具体的には、仏教・神道テキスト、さらには文芸テキストに含まれる 禅語 に注目し、当時としては極めて奇抜な語彙として受容されたはずのそれら大陸渡来の禅語が、神道の教学樹立に大きく寄与したこと、さらにそれらが同時代のヴェトナムや朝鮮半島の宗教テキストにおいても重要な役割を担っていたことを確認しつつ、東アジア全域に同時多発的に展開した宗教思想(禅テキスト)の共通基盤の一端を解明した。加えて、この探求を通じて、これまで日本一国内に閉ざされがちな神道史研究を、東アジアの信仰動態との連関のなかで考察すべきことを新たに提案した。なお、禅語の受容をめぐるのは、「性花という思想 世阿弥・禅竹能芸論における禅の強度」(『画期としての室町 政事・宗教・古典学』所収)でも考察を加えた。

以上、本研究が予め立てた7項目に亘る課題が、それぞれどのような論考・口頭発表のうちで具体化されたかについてその概要を記してきた。(5)(6)のように当初の計画を十分実行することができなかった課題もあるものの、その他の課題においては当初の目的をおおむね遂行することができたと確信している。今後は、3力年に亘る論考成果をさらに総合して、「2」で展望しておいた最重要な課題、すなわち「しばしば平板な議論に終わりがちな「書物文化論」を現代文化の抱える諸課題の最前線へと押しあげ、大きな転形期にある21世紀の書物の世界を根底から見直すための理論的基盤を確立したい」という課題に、単行本という形で応えることができると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) 小川豊生、「中世神道と神楽の世界 その接点を求めて」、『HERITEX』、名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター編、査読無、vol.3、2019.8 刊行予定、pp.1-14
- (2) 小川豊生、「宝珠のトポロジー 中世神秘哲学序説」、『現代思想』(10月臨時増刊号)、青土社、査読無、vol.46-16、2018.10、pp.356-367
- (3) 小川豊生、「反転する神学 中世における「神道」成立の機制をめぐる」、『現代思想』(1月臨時増刊号)、青土社、査読無、vol.45-2、2017.2、pp208-221

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 小川豊生、「『夢中問答』の説話学 東アジアにおける霊性の波動』、説話文学会北京特別大会(招待講演)(国際学会)、2018.3、於.中国民族大学
- (2) 小川豊生、「修験的想像力と神楽の世界 中世神道研究との接点を求めて』、名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター(主催)、花祭りの未来を考える実行委員会、国際日本文化研究センター(共催)シンポジウム「花祭×いざなぎ流 神楽のなかの祭儀・呪術・神話」、2017.11.24、於.名古屋大学
- (3) 小川豊生、「中世と近世を横断する神話学』、日本文学協会大会ラウンドテーブル「近世神話の可能性を問う」、2017.11.19、於.相模女子大学

〔図書〕(計4件)

- (1) 前田雅之編、勉誠出版、『画期としての室町 政事・宗教・古典学』、2018.10、515ページ

(pp.249-266)

- (2) 宮腰直人編、笠間書院、『文学史の時空 (シリーズ 日本文学の展望を拓く 第四巻)』、2017.11、460 ページ (pp.196-213)
- (3) 河野貴美子、Wiebke DENECKE 他編、勉誠出版、『日本 文 学史 第二冊 「文」と人びと』、2017.6、561 ページ (pp.247-256)
- (4) 土方洋一、助川幸逸他編、竹林舎、『新時代への源氏学 8 物語史 形成の力学』、2016.5、351 ページ (pp.319-341)

〔その他〕(計2件)

- (1) 小川豊生、「中世王権と呪術の世界 愛と怒りのほとけ「愛染明王」をめぐって」(講演)、摂南大学国際教養セミナー「日本中世の呪術とまじない」、2018.10.14、於.大阪工業大学梅田キャンパス
- (2) 小川豊生、「日本図 から読み解く中世神話の世界」、佛教大学四条センター公開講座「神話・伝承の広がりへ」、2018.8.27、於.佛教大学四条センター